

## 義を求めた幕末の豪商 菊地淡雅・教中親子

宇都宮伝統文化連絡協議会長 柏村 祐司



菊地淡雅像



菊地教中像

いずれも栃木県立博物館所蔵

世の中には事業に成功し多大な財を得る人は少なくないが、それを芸術文化や学問の発展に還元することはなかなかできるものではない。

江戸末期の豪商菊地淡雅・教中親子は、自ら書画や学問をたしなみ、文人墨客に惜しめない援助を与えた稀有の人である。

菊地淡雅は天明八(二七八)年、都賀郡栗宮(小山市)の医師大橋英斎の子として生まれる。名は知良、通称は考兵衛、晩年に淡雅と号した。十一歳の時に遠縁に当たる宇都宮寺町の商家佐野屋を営む菊地治右衛門考古の養子となり、のち考古の娘民子を妻とした。菊地家は古くから古着・質屋を営む商家で、考古の代には十軒を超す分家を出すほどであった。

最盛期には間口一〇間、奥行三二間の大店舗を構え、家族、使用人合せて二〇人余を有し、白木屋、大丸、越後屋(三越)等と並ぶ江戸屈指の豪商になった。嘉永四(一八五二)年には呉服問屋、白子組木綿問屋の一員となり、両替商や質屋も営んだ。私財を蓄えた淡雅は、天保の飢饉の折には栗宮村や宇都宮で貧者に金や米を施し救済、また晩年には病者のために湯治場として奥鬼怒の日光沢温泉を開発した。一方、学問・書画を愛し、佐藤一斎・立原杏所、渡邊崋山・高久齋崖等多くの儒者や画家と交わり彼らを支援した。中でも同郷の高久齋崖の良き理解者で、生涯にわたって援助を惜しまず齋崖が没すると葬儀一切を取り仕切ったという。彼の著になる「淡雅雑書」によれば、淡雅は義によらない富をいましめ、商業の根本精神を「利」に求めず「義」に求めよと説いたとある。

菊地淡雅の子教中は、文政十一(二二八)年、江戸日本橋で生まれる。通称は父と同じ考兵衛、潜如と号した。幼年より書をよくし、詩画を嗜んだ。もの静かで分け隔てをしない彼のまわりには常に文人たちが集まり、居宅の蕨真堂は文化サロンとよまれたという。

嘉永六(一八五三)年、二十六歳の時に父が亡くなり家業を継ぐ。しかし幕府の開国政策による経済変動や安政の大地震(一八五五)による店舗の倒壊・焼失等により佐野屋は大打撃を受ける。それを期に経営の主力を江戸から宇都宮に引き上げ、新田開発による領地経営に着手。鬼怒川沿岸の岡本新田・桑島新田の開発を行い、町人請負新田の地主となった。この事業は、財政難を新田開発等で乗り越えようとする宇都宮藩の財政政策と合致。その功績により、万延元(一八六〇)年に宇都宮藩から御家来並・七人扶持に取り立てられた。翌年には九歳の息子慧吉郎に家業を譲った。

一方、教中は姉巻子の夫で攘夷論者の大橋訥庵の影響を受け、訥庵らとともに攘夷運動に奔走、江戸城坂下門外の変で訥庵とともに指導者となり捕えられた。変後逮捕され入牢したが、出牢後まもなく死去した。

淡雅、教中親子二代の「義」を求めた生き方は、時代が変わろうと賞賛に値する。現在の事業者にも見習ってほしいものである。